

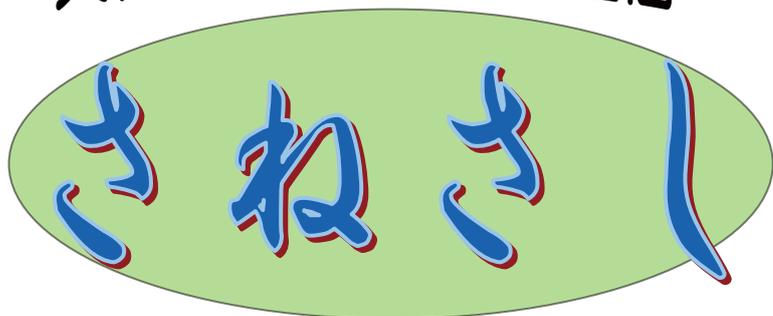


発行

平成27年12月12日
相模原市文化財調査・普及員
広報グループ

文化庁指定
文化財愛護
シンボルマーク

両手のひらと日本
建築伝統の組物を
イメージしたもの



～「さねさし」とは、相模の枕詞です～

鵜野森～上鶴間地区文化財巡検史跡探訪

大野中公民館（図①）にて、小方館長より鵜野森地名の発祥などのお話を聞き、今回の史跡探訪がスタートしました。

②日枝神社：祭神 大山祇命

鵜野森鎮守の氏神。境内の日枝神社之碑、力石之碑を観察。

③幸延寺：山号「福寿山」日蓮宗鎌倉妙本寺末寺

本堂屋根の角の無い鬼瓦、客殿玄関の唐破風屋根など観察。事前に今回の巡検企画を聞いた幸延寺の住職のご厚意により通常は非公開の寺宝の古銭を見せていただけることに。1万枚以上ある古銭の量と重さに驚き圧倒。唐の開元通宝(621年)から明の宣徳通宝(1433年)まで鑄造年が判読できる古銭が数多くありました。

④元鹿島神社之碑、谷口堰山記念碑、上鶴間堰復旧記念之碑

当堰の両碑は境川からひいた水田の水路のため、この地に

目次

- ①・鵜野森～上鶴間地区文化財巡検史跡探訪
- ②・古民家園の燻蒸活動
・北部班活動報告：イベント「甲州街道を歩く（日野宿）」
- ③・時代を駆け抜けた漸進社の足跡
- ④・～深堀川をたどる～



幸延寺での開元通宝



当日のルート
①～⑦までを順に歩きました。

土：祭神 武甕槌命

手（1868）に神仏分離令が発せられるまで、行事はすべて歴代住職が斎行していたとのこと。

：山号「方運山」日蓮宗鎌倉本覚寺末寺から身延山久遠平成さがみはら風土記稿)

雀運動の舞台になった「武相困民党記念碑」を観察。昭和（1981）まで使用していた庫裡は現在は緑区大島の相模寸公園内に移築されています。

⑦旧原町田駅、行幸道路出発地、ケヤキ並木跡

旧原町田駅にお召し列車で来た昭和天皇が通るために陸軍士官学校（現：座間キャンプ）まで造られたのが行幸道路。今でも並木沿いの雑居ビル脇に原町田駅名標が残っていました。

（東部班 三嶋）

古民家園の燻蒸活動

古民家園は、上鶴間本町3丁目の青柳寺という寺にあった県指定重要文化財の庫裏を大島の河岸段丘崖の下に移築したもので、現在は市で管理して一般公開しています。

この建物は屋根が茅葺なので、屋根につく害虫駆除のため、囲炉裏で薪を燃やして煙を出す、燻蒸という作業をしなければなりません。そのため週1回二人一組で火を焚いています。本来なら、毎週行いたいのですが、メンバーが6人しか居ないため、現在は月3回しか実施できていません。

燻蒸はただ囲炉裏で火を焚くだけなのですが、これがなかなか奥が深くて、楽しい活動です。

冬は火が暖かく、暗い古民家の中で燃える火を見つめる、雰囲気のあるひと時です。囲炉裏には天井から自在鉤が下がっていて、その長さが調整できるように工夫がされているのですが、その調整弁（正式名称不明）が木彫りの鯛になっています。夏はその鯛が炎に曝さらされて、まるで咎とがある如くに思われ、哀れです。

燃やす薪にも個性があって、長い時間かかって燃え尽きるもの、ぱちぱちと音を立てるもの、火の粉を飛ばすものなど、まるで人生のようです。

火の燃える音、火の色の変化、鍋の湯の音、そして四季折々の鳥や虫の声、風の音などを聴きながら、なにも考えないで火の管理をしている時間は、日々忙しく生きている現代人にとっては、貴重な時間だと思います。古民家園の燻蒸を一緒にいかがですか。

（古民家園事業実行委員会 久保田）



火もしの風景

北部班活動報告：イベント「甲州街道を歩く（日野宿）」

10月19日（月）北部班137回目の定例会の後、JR中央線日野駅まで行き甲州街道の日野宿を訪ねました。日野宿と云えばすぐに「新選組のふるさと」と思い出される方が多いと思いますが、今回はそれ以外の印象に残ったところを紹介します。

①東の地蔵・西の地蔵

日野宿の東端と西端にはそれぞれ日野宿の安泰と旅人の守護を願った地蔵が祀られています。宿場の範囲は東の地蔵から西の地蔵までのおよそ1kmで日野宿本陣や問屋場・高札場跡などのほか古い寺社や蔵などが残っています。

②万願寺一里塚

現在の甲州街道は日野橋で多摩川を渡っていますが、江戸時代の初期は日野橋より下手の国立市青柳から多摩川を渡り万願寺の渡しを通過して日野宿に入りました。かつては街道の両側に2つあった塚が北側のものが戦後マンション建設等で取り壊され南側の塚1つが残り、今では旧甲州道中の名残を示す貴重な史跡となっています。

③普門寺の「けんころ地蔵」

「健康で元気に長生きし長患いなしでコロッと大往生をする。」を願って地元・近在の人々や商店会の方々の寄進で平成23年に建立されました。正式名は「日野宿健康長寿地蔵尊」です。けんころ地蔵のある普門寺墓地内には市内最古（延宝2年=1674）の地蔵尊のほか5基の青面金剛像庚申塔及び現在表面が剥落していますが市内唯一の主尊阿弥陀如来像庚申塔があります。

（北部班 光廣）



日野宿問屋場・高札場跡で記念撮影

時代を駆け抜けた漸進社の足跡

大沢公民館脇の旧大沢村記念碑から沿革を見ると、「～明治11年、高座郡下の大島村、上九沢村、下九沢村となったが戸長役場は存続された。明治22年～三か村は合併して大沢村の発足となった。大沢村は農業を主な産業とし、特に養蚕の振興に力が注がれた～」とあります。平成元年頃の相模原市域耕地の約95%が畑地であった環境からも、明治・大正・昭和と養蚕業が盛んだったことが分かります。

座繰製糸結社の漸進社は明治19年6月、高座郡大島村に大貫友八（生糸仲買商）・宮崎重一郎・中里鶴吉・斎藤福治郎氏ら大島村の16名により、資本金式千円で設立されました。現在の緑区大島の大島交差点西方です。日本最初の農民資本による共同生糸揚返・共同販売のための製糸工場と言われます。

榎戸バス停付近には、大貫友八氏が建立した漸進社の創業記念碑(写真1)が残っています。それには、明治19年6月3日に大貫友八氏を含む16名を発起人として大島村製糸漸進社の設立を神奈川県令(沖守固)宛に願い出たことが刻まれています。この大貫友八は上州に足を運び生糸の買い付けも行っていたようです。設立目的は、各自が製糸した生糸を持ち寄り、共同揚返しを行って品質の統一と定量化を図り、共同で有利に販売するものでした。初代社長は宮崎重一郎、2代目は中里鶴吉(若い頃、鎌水村生糸商人大塚宗兵衛のもとで生糸取引の実務を学ぶ。信州上田で生糸や産卵紙の買い付けをした)と言われます。相模原はもとより、愛甲、津久井、東京都南多摩の農民も製糸を委託したようです。又、屑物生糸の取り扱いも行われ責任者には中里鶴吉・大貫友八が選ばれています。買い付け先は八王子・上野原・谷村のようです。

明治26年商法施行に伴い合資会社組織に改められ、事業を拡大しました。大正2年頃には所属揚返所142ヶ所、出資社員1,050人、加入製糸者数12,000人、年生産量195,000kgに達したといえます。座繰製糸工場としては、全国で碓氷・甘楽・下仁田とともに4大社に数えられました。大正4年、産業組合法により合資会社から信用販売組合連合会組織に変更しました。大正5年頃、各産業組合では製糸

工場を設置し、器械製糸へ切り替えられました。

この漸進社では主に大沢地区の人々が働いたと言われます。大正13年から直営工場が営業を開始しました。『相模原の製糸業』(相模原市教育委員会編)の写真では、立派な工場の中で近代的な機械を前に、多くの若い工女が熱心に仕事をしている様子が見られます。給料は現代にも通じる能率給のようでした。収容60名近い女子寮も会社の近くに完備され、待遇も良く人気があったようです。

しかし、大正3年の第一次世界大戦により生糸暴落し、大正11年頃は不況が慢性化しています。追い討ちをかける様に、大正12年には関東大震災が発生しています。さらに、昭和2年に金融恐慌も起きています。経済的に大混乱の時期です。また、他の製糸工場も愛甲郡に新設されました。これらの影響を受け、昭和12年に解散し約50年の幕を閉じました。しかし、漸進社は相模原の近代工業のさきがけと言えるのではないのでしょうか。同社商品の出荷先は、設立当時は上溝市場、その後、横浜の原商店であったといわれます。下九沢の六地藏交差点に角柱塔の道標(高さ92cm、幅15cm、奥行き15cm)があります。(写真2)正面に「南 本村役場及小学校ヲ経テ漸進社ニ至ル」と刻まれています。右側に「東 上溝村ヲ経テ厚木方面」、左側に「北西 川尻村ヲ経テ多摩御陵及中野方面」とあります。また、この道標は大沢青年團第6支部により、昭和天皇の御大典を記念して昭和3年11月に造立されました。

(北部班 駿河)



(写真1) 創業記念碑



(写真2) 六地藏の道標

～深堀川をたどる～



2013年5月に東南班のフィールドワークとして、班内の地域を流れる深堀川をたどりました。今回は、その経験を元にマップを作りましたのでご紹介します。

深堀川は南区東大沼2丁目にある大沼神社の境内(図①)と、近隣の小沼(図②)を水源としています。その後、相模大野駅南口を経て、現在の流路は大正堂家具センター付近で国道16号線を渡り、大和市との境界で境川に合流するおよそ2kmほどの河川です。

小規模な河川ですが、深堀という名がつく通り、かつては深く谷間のような川だったそうです。現在の深堀川は、暗渠になっている部分が多く、川が存在に気がつかない方も多いでしょうが、大沼から相模大野南口の相模大野7丁目から、再び暗渠となる上鶴間3丁目の深堀中央公園までは開渠になっています。住宅街を流れる開渠部分は長い距離ではありませんが、のんびり鴨が泳いでいたりして心和む風景となっています。

深堀川流域付近にはいくつかの歴史の見所があります。水源となる大沼神社は、日本武尊がこの大沼に来た時、計られて火責めにあったという伝説が伝わっており、この付近は元禄12年(1699)、大沼新田の開発の際、新田村の鎮守として、享保21年(1736)に勧請されました。当時は大沼弁財天と呼ばれていて、境内には「辨財天」の石塔が残っています。相模大野駅の東、国道16号線の陸橋の横には、蚕守稻荷神社(図③)があります。戦前までこのあたりは一面の桑畑が広がっていて、蚕産の守り神として、信仰を集めました。

相模大野駅南口から東林間に向かった相模大野9丁目の新町中学校の近くからは、旧石器時代の遺跡(図④)が発掘されています。国道16号線、大正堂家具センター近くの歩道橋横には、富士塚(図⑤)が残っていますが、現在は大和市に浅間神社は移築されています。ほかにも、流域付近には見どころがいくつかあり、流長2kmほどと短い深堀川ですが、相模原の歴史を知ることができます。

(東南班 北岡)

発行連絡先 相模原市教育委員会 文化財保護課 電話 042-769-8371